

「生きる喜び」を目的とするデンマーク幼児教育に関する研究

目的

本研究を総括する足立は、デンマークの幼児教育から生涯学習の現場を10年にわたり視察し、その教育の目的が、日本の文科省の言う「生きる力」の育成にあるのではなく、「生きる喜び」の醸成にあることを指摘した(足立, 2008)。

そこで本研究では、デンマークの教育において、「生きる喜び」の教育が、いかに実践されているかを明らかにするために、以下の検討を行った：(1) デンマークの教育の基礎を築いたニコライ・フレデリック・グルントヴィ(Grundtvig, N. F. S. 1783-1872)の資料を探り、文献的検討を行う、(2) 実際にデンマークの幼児教育、初等教育の現場に参加し、文献を通しては明らかにできない「生きる喜び」の醸成とは何か、その具体的な手がかりを得る。

実施内容

1. グルントヴィに関する文献的検討

日本で唯一、グルントヴィに関する文献が豊富に収蔵されている東海大学松前記念館を訪問し、難波克彰同大学名誉教授の指導により、本研究に関連する資料を得た。

2. 幼児教育、初等教育の現場への参加

2013年3月、本学科3年生18名と共に、グラムスペア保育園、グスタミネ農場保育園、アレロッド森の保育園、グラムスペア・フリースコーレで参加実習を実施した。

結果及び考察

1. 文献的検討

さまざまな資料の中で、特に、グルントヴィ主義のホルケホイスコーレ(国民高等学校)の校長、ヨエンセン氏が、難波教授に宛てた書簡は、極めて興味深い内容であった。すなわち、この書簡が1990年代半ばに書かれたも

のであるにもかかわらず、SNSを中心としたコミュニケーションに依存する現代の風潮に警笛を鳴らす内容となっており、「向かい合っ
て目を合わせて、そして口と耳でもってお互いに心につなげることが出来る」コミュニケーション、すなわち「生きた言葉」の重要性を指摘しているからである。この「生きた言葉」が、乳幼児期の子どもの発達を促す上で必須の要件となることは言を俟たない。

2. 現場への参加

紙面の都合上、全ての参加実習の結果について記載することはできないが、学生たちが、日本の教育と異なる点として異口同音に述べていたことは、個を徹底的に重視する教育である。たとえば、初等教育のあるクラスでは、それぞれの子どもが、一番くつろげる場所で学ぶことが許容されており、日本のように、クラス全員が同じように席に着くことはない。

グラムスペア・フリースコーレのローゼンバーク校長は、「個を重視する教育が、子どもの健康な自我の発達を促す」と述べていたが、その健康な自我こそが、「生きる喜び」の基盤となることが、今回のデンマークでの参加実習を通して確認されたことである。



グルントヴィの像の前で